

「洗礼者ヨハネの証し」

(ヨハネ1:6～8[1～18])

挽地茂男

2018.12.16 日本基督教団千歳丘教会

アドベントの第3週目を迎えました。ヨハネによる福音書1章1－18節(「ロゴス賛歌」)を少しずつ、「初めに言があった」(1-3節)から「光は暗闇の中に輝く」(4-5節)という主題に沿って学んで参りました。イエス・キリストのご降誕まで、あと少しです。神様がイエス・キリストを人類の歴史に遣わしてくださったことは、神の私たちへの最大の贈物です。イエス・キリストの出来事が人類の歴史に起こしてきた波紋の大きさを考えるだけでも、そのことが分かります。たとえどれほど価値低き者とされている人も、すべての人がかけがえのない人格であることを宣言し、どれほど敵対的な関係にある人をも愛と赦しをもって



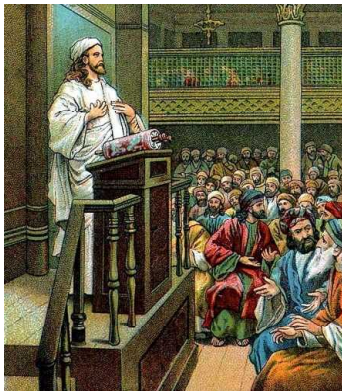
受け入れるように教えたイエス・キリスト。この主イエスをとおして、わたしたちはまた、彼を遣わした神を愛と恵みに富みたもう、身近な「天の父」として向き合うことが出来るようになりました。このイエス・キリストによって、人間の社会で常識とされていた価値体系がひっくり返されてしまう出来事が起ったのです。

主イエスに出会った人たちの中で、主イエスの中に目に見えない永遠的な価値を——「ロゴス賛歌」の比喻を使えば「光」を——見いだし、



劇的にその生き方を変えた人と言え、パウロや直弟子たちの名が挙がるのではないのでしょうか。しかしわたしは、最初にその生き方を大きく変えたのは洗礼者ヨハネではなかったかと思います。ヨハネは人々に、神に対する明確な悔い改めの意志をもって、洗礼を受けるように迫っていました。その洗礼運動の結果、彼は自分に従う者たちを獲得し、彼の周りには一

定の弟子グループが形成されてい
ました(ヨハネ1:35-37, マルコ2:
18)。しかしある時から彼は、キ
リストを証しすることに徹するよ
うになります。使徒言行録の中
には、少しずつ教勢を伸ばしてい
くキリスト教の中に、洗礼者ヨハ
ネのグループの影響の残滓と、そ
のグループがイエスの信託者に移行
していく痕跡をみることができます。
使徒言行録 19章 1-7 節。



説教するアポロ

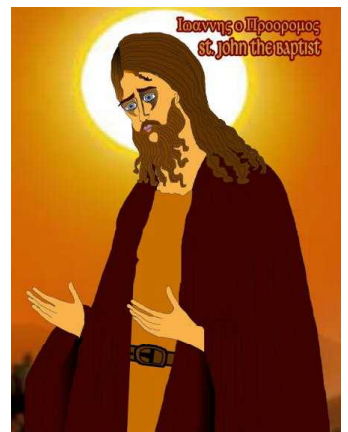
19:1 アポロが
〔エフェソで
宣教した後〕
コリントにい
たときのこと
である。パウ
ロは、内陸の
地方を通してエフェソに下って来
て、何人かの弟子に出会い、19:2
彼らに、「信仰に入ったとき、聖
霊を受けましたか」と言うと、彼
らは、「いいえ、聖霊があるかど
うか、聞いたこともありません」
と言った。19:3 パウロが、「それ
なら、どんな洗礼を受けたのです
か」と言うと、「ヨハネの洗礼で
す」と言った。19:4 そこで、パ
ウロは言った。「ヨハネは、自分
の後から来る方、つまりイエスを

信じるようにと、民に告げて、悔
い改めの洗礼を受けたのです。」

19:5 人々はこれを聞いて主イエ
スの名によって洗礼を受けた。19
:6 パウロが彼らの上に手を置く
と、聖霊が降り、その人たちは異
言を話したり、預言をしたりした。
19:7 この人たちは、皆で十二人
ほどであった。

ヨハネの洗礼を受けてキリスト者
になる人たちがいたのです。アポ
ロという伝道者に導かれて入信し
た人たちは、ヨハネの洗礼を受け
ていたのです。ここにはヨハネか
らイエスへと信仰の歴史が動いて
いく連続と非連続が、その移り行
きがはっきりと見えています。多
くの新約学者が言うように、イエ
スに洗礼を施した師匠であったヨ
ハネを、後のキリスト教が無理矢
理、イエスの履き物のひもを解く
値打ちもない僕の位置に降下させ
たのではないの

です。洗礼者ヨ
ハネもまたイエ
ス・キリストと
出会うことによ
って、それまで
の価値観をひっ
くり返されて、



St. John the Baptist

徹頭徹尾キリストを証し、キリストに(弟子をも含めて、ヨハネ1:35-37) 持てるものを献げる人になっていったのです。今日の聖書箇所はそのヨハネが引き受けた使命を明らかにします。6節。

1:6 神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。

続いて、具体的な彼の使命が語られます。7-8節。1:7 彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。1:8 彼は光ではなく、光について証しをするために来た。

皆さんは、教会の二階の集会室の壁面に掛けられている絵のことは、一度説教(2017.7.9)の中でご紹介しましたので、ご記憶があるかと思いますが、あの絵は、ブリューゲルの描いた「洗礼者ヨハネの説教」という絵です。ブリュー



ゲルと言え
ば、皆さん
が1番よく
ご存じの作
品は「バベ
ルの塔」では
ないかと思
います。昨
年(2017)上
野の東京都
美術館で
ブリューゲ
ル「バベル
の塔」展が

やっております、「バベルの塔」が展示されておりました。創世記の「バベルの塔」の物語は、バビロン捕囚を経験したイスラエル民族の、バビロン批判〔「バベル」とはヘブライ語で「バビロン」のこと〕、バビロンの文明に対する批判を込めて物語られています。ブリューゲルの絵は、バベルの塔すなわちバビロンの高塔神殿(ジグラット)が崩壊する様を描きます。



一方、「洗礼者ヨハネの説教」という絵は画面の中央よりやや左上に配置された洗礼者ヨハネが説教をしている場面設定の中に、同時代のプロテスタントの一派の集会を描いた絵だと解釈されています。洗礼者ヨハネは当時のネーデルランド〔現在のベルギー、オランダ、ルクセンブルクの3か国(ベネルクス)にあたる低地地域〕で優勢でありました再洗礼派という〔幼児洗礼を認めず、明確な意志



ブリューゲル「洗礼者ヨハネの説教」

を伴う成人再洗礼を要求した〕グループの宗教的な支柱でした。

洗礼者ヨハネの説教を聞くために、大勢の人々が森に集まっています。一部、聖書の中の人物もいますが、説教に聞き入っている民衆はほぼすべてブリューゲルの同時代人たちです。説教者が左手で指さす方向を注意深く見ると、少し離れたところに明るい服装で、腕組みをして立っているイエスらしい人物の姿が認められます。また説教者の背後には、説教者の弟子と思われるやや身なりのいい男たちが立っています。群集の中には大きな丸い帽子をかぶったスペイン人らしい人や、長髪を後ろで束ねた弁髪中国人らしい後ろ姿も見えます。また左の木の横には、アラブ人らしい姿も見えます。さらに右の木の横には、修道僧が二人説教に聞き入っています。さら

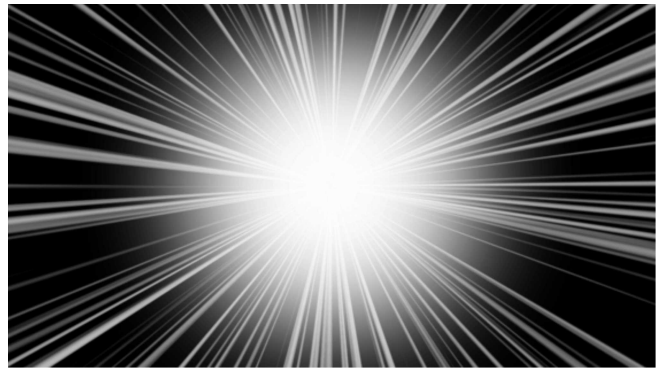
に興味深いことに、画面右上の小さな高い場所に、高貴そうな身なりの女性が3人立っています。そのうち2人は頭巾をかぶっていません。庶民の女性は外出時には頭巾をかぶるのが当時の常識だったことからすると、真ん中の赤い長い衣の女性は聖母マリアで、他の二人は聖母と[異父/義理の]姉妹の関係にあるクロパの妻マリア（・クレオファス）とマリア・サロメかもしれません。

再洗礼派は現在、メノナイトやアーミッシュ、ブレザレン教会として残っていますが、最初期は、異端とされたグループなのです。そのために絵の奥に描かれた教会から離れた森で集会が行われているのです。ブリューゲルの絵は、洗礼者ヨハネの聴衆の中に、聖書時代の人々を配置して、これらの人々がヨハネの説教に聞き入っている姿を描くことを通して、この集会を間接的に肯定し、同時に、世界の国々の人々を配置することによって、この集会が世界の人々に支持されていることを表現しているとされます。

再洗礼派の人たちが洗礼者ヨハネに見いだしたのは、神に対する

峻厳な悔い改めの意志、そしてそれに基づく、「自覚的な意志をもった成人洗礼」だったのです。成人洗礼のみを有効とする再洗礼派の信念を、ヨハネの悔い改めを要求する苛烈なメッセージが支えたのです。キリスト教国に生まれて幼児洗礼を受ければ、自動的にキリスト者になるというのではなく、明確な悔い改めの意志、信仰の自覚が必要だとしたのでした。

ヨハネ福音書の描く洗礼者ヨハネは、党派的支持者ではなく徹頭徹尾キリストの証言者として描かれます。「証言者であること」それはキリストを宣教する者にとって最も基本的な姿勢でありながら、しかしもっとも失われやすい姿勢なのです。イエス・キリストに対する洗礼者ヨハネの位置が、教会のとるべき位置であることを、福音書記者は示しています。この洗礼者ヨハネがキリスト教の成立期に与えられたことは、神さまの大きな賜物であったと思います。本日の箇所の7-8節をもう一



度みておきましょう。

1:7 彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。1:8 彼は光ではなく、光について証しをするために来た。

そしてこの光についての証しが、その担い手たちつまり洗礼者ヨハネやアポロやパウロや初代教会の人たちへと、連続と非連続を含みながら受け継がれていったのです。また「世の光」キリストと「光を証する」キリスト者という観点から見ると、パウロの回心の物語には、たいへん興味深い点が含まれています。かつてのキリスト教の迫害者であったパウロは、キリスト教徒を捕らえるためにダマスコに向かう途上、イエス・キリストと出会い、その光に打たれて視力(目の光)を失います(使徒9:1-9, 22:6-11, 26:12-18)。しかし彼は、キリスト者アナニアを通し



て再び視力(光)を得るのです。この物語は、非常に象徴的です。しかし物語を象徴的に読み取ることが可能である一方で、現実として、パウロはそれまでの価値観を、完全にひっくり返されてしまうのです。彼は人間的価値から見て、実に誇りうるものを多く持つ人でした。ところが、キリストと出会い、キリストの光に打たれ、キリストを知ったとき、それらの人間的価値や誇りがひっくり返され、色褪せたものになってしまったのです。パウロはその回心体験をこう語っています。「わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員。熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした。しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失

いましたが、それらを塵あくと見なしています。キリストを得、キリストの内にいる者と認められるためです」(フィリピの信徒への手紙 3 章 5 - 9 節)。家柄、血筋、才能など、人間的価値としていたものがひっくり返ってしまったのです。ここにはキリストの福音の「過激さ」がよく表されています。福音はわれわれをあらゆる人間的しがらみから解放してくれるはずものなのです。最初のキリスト教会にあらたにパウロのような人物が与えられたことは、これまた神の大きな賜物であったと思います。パウロの豊かな才能は、いまや自分のためではなく、キリストの福音を証しするために豊かに用いられるようになりました。聖書に収められて



いますパウロの手紙だけをとっても、それは実に大きな信仰的財産です。紀元1世紀のギリシア・ローマの神々の世界で、パウロが妥協することなく、なぜキリス

ト教なのか、イエス・キリストとは何者なのか、本当の神はいかなる神なのかなど、はっきりと解き明かし、その歴史に生じる連続と非連続を整理してくれていなければ、イエス・キリストの福音は随分あいまいなものになってしまった可能性があります。

パウロはコリントの信徒への手紙二 4 章 6 – 7 節でこう語っています。

4:6 「闇から光が輝き出よ」と命じられた神は、わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。4:7 ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。



そして同じ 4 章の 16 – 18 節。

4:16 だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。4:17 わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。4:18 わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。

パウロは神が与えてくださった光で、目に見えないものを見るようになったのです。

またパウロはここで人間の「外なる人」と「内なる人」について語ります。人間には外面と内面があることは言うまでもありません。わたしたちは外側には気を使うが、内なる見えない部分を疎かにしがちです。そのような私たちに対して、パウロは「見えないものに目を注ぐ」ことの大切さを語ります。サン・テグジュペリの『星の王子さま』で、地球に降りてきた王子と友達になったきつねが、お別れの時に、おみやげに、一つ

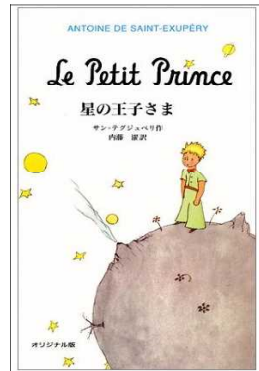
人生にとっての大切な秘密を贈り物すると約束します。そしてついにお別れの時がやってきます。サン・テグジュペリの文章はこうなっています。

「じゃ、さよなら」と、王子さまはいいました。

「さよなら」と、キツネがいいました。「さっきの秘密をいおうかね。なに、なんでもないことだよ。心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないってことさ。かんじんなことは、目に見えないんだよ」

「かんじんなことは、目には見えない」と、王子さまは、忘れないようにくりかえしました。

「大切なものは見えないものです」。確かにそうです。「外なる人」としては、わたしたちは例外なく、年を重ねるとともに、加齢とともに肉体的に弱くなってまいります。肉体の衰えはいかんともしがたく、それだけにお化粧をしたり、健康願望が強くなることは、自然なことです。しかし、見えない内面が実は外面に現れてくることも大切な事実です。「四十になった



ら、自分の顔に責任をもちなさい」と言われるのも、そのことをいい表しているのかもしれませんが。つまり、人間は、「外なる人」と共に、「内なる人」として生きていることも、まぎれもない事実なのです。年齢を経ておられるのに、実にハツラツと若々しい高齢者の方もおられますが（例えば故日野原重明医師）、その反対にまだ大学生で二十歳前後だという若さで、まるで若々しさを感じさせない、「年寄りくさい」人も少なからずいます。将来への夢やビジョンがなく、「外なる人」より先に、「内なる人」が老化しているのかもしれませんが。「外なる人」と「内なる人」、つまり外面と内面は人間において有機的に関わりあっており、肉体的に衰え、弱くなっても、内面的に、精神的に強い人がいます。進行性筋ジストロフィーのような難病や脊髄損傷のために寝たきりになっても（例えば星野富弘さん）、残された体の機能を最大限に使って、口に絵筆をくわえ



て絵を描き続けておられる方をテレビのドキュメンタリーなどで見ると、そのような人の姿や生き様はわたしたちに深い感動を与えてくれます。わたしたちも、だんだん肉体的に衰えていっても、心を強くもって生きてゆかなければと励まされます。

では、「わたしたちの外なる人は衰えていくとしても、わたしたちの内なる人は日々新たにされていきます」（16節）とパウロが言うとき、肉体的に衰えても、精神的に強く生きなさい、若々しくハツラツと生きなさいという、内的生活のすすめをしているのでしょうか。精神論を言おうとしているのでしょうか。そのようにも聞こえます。しかし、必ずしもそうではありません。ある種の「精神主義」のすすめが語られているのではないからです。精神や心の若さや健康は大切です。しかし、パウロがここで語るのは、霊と肉、あるいは精神と肉体を二つに分けて霊的なもの、精神的なものをことさら強調する二元論ではありません。

では「だから、わたしたちは落胆しません」（16節）とパウロが語る、彼の「内なる人」が日々新



たにされる根拠は何でしょうか。まずは6節です。「わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光」があるからです。目に見えない大切なものを見る光（視力）が与えられているからです。そして7節「わたしたちは、このような宝を土の器に納めて」いるからです。わたしたちは、「土の器」ですから「外なる人」は日々衰えてゆきます。しかし「内なる人」は日々朝日がのぼるように、日々新たにされてゆくのです。自然的人間の肉体は、創世記の物語にしたがって言えば、土から造られ、土に帰る存在です。創世記にはこう書かれています。「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる



者となった」(創世記2:7)。わたしの友人が、医学部の学生時代に、人間の値段を計算しました。〔これも何度か申し上げましたけれど。〕人間を純粹に物質的な面だけで考えたときの値段です。つまり人間をすべて物質的なものに還元して、その物質をその大学に機材や物品を納入している、業者のレートで換算したのです。

彼は「いくらになるか」とわたしに聞きました。

ジェット戦闘機1機が100億くらいはするから、

「100億 くらいかな」、と答えました。

「そんなにしないよ。」

「億はするだろ。」

「シナイ、しない」

「何千万の単位？」

「しないよ」

「高級車1台くらいは？4, 5百万？」

「しないって。万はつかない。」

「えっ。千の単位？」

「千もしない。」

「えっ。」

「56円。」

この値段が正確なのかどうか、わたしには確かめようがないので

すが、人間の肉体の化学物質としての原価は56円かどうかは別にしても、自然的人間は、聖書が言うところでは、所詮「土の器」なのです。さらに、誤解を恐れず言えば、「こころ」や「精神」は肉体と同様、神様から与えられたものですが、「こころ」や「精神」も、神から離れては、自然的人間の部分なのです。ですから、人に優しくなれる同じ人間が実に冷酷になることがあります。「良心」は神がすべての人間に与えてくださった恵みです。しかし、人間の良心は、状況が変わると、心変わりしてしまうことがあります。そして、時代が悪かったから、状況がああだったからと、いいわけしたりします。つまり、こころや良心すらも、人間の依って立つ基盤、人間の存在の根拠とはなれないのです。このような「土の器」であ



る人間に、神がいのちの息を吹き入れられた、そして人は生きる者となったのです。このいのちのゆえに、一人ひとりの存在はかけがえのない価値あるものとなっているのです。そして、この神はいまやイエス・キリストという新たないのちを、わたしたちに吹き込んで、新たないのちを与えてくださったのです。そしてこの「**命は人間を照らす光**」(ヨハネ1:4)なのです。それゆえ、この「土の器」である人間に、イエス・キリストという神の力が恵みとして与えられている、とパウロは言うのです。

イエス・キリストのいのちに生かされるようになるとき、わたしたちの人間的弱さから自由にされ、さらには強さからも自由にされ、時には、逆転現象が起るのです。人間の弱さのなかに(こそ)神の力が働くという逆説です。肉体のトゲを抱えていたパウロが癒されることを三度も神に祈ったけれど、その祈りは聴かれませんでした。その代わりに、神からの語りかけを聞きました。

「**私の恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのである**」と。「**だから、キ**

リストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜

んで自分の弱さを誇りましょう。わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。」(コリントの信徒への手紙二12:9-10)

実に、驚くべき、強さと弱さの逆説です。キリストが中心軸となるとき、わたしたちの生と死の様は変えられてゆきます。自分自身が中心軸になって努力するとき、どれだけ真面目な動機で真剣に生きていても、所詮、自分自身をがんじがらめに縛る律法主義にすぎないことを、パウロはキリストに出会うことによって発見したのです。また、かつてのパウロは自分だけを正し



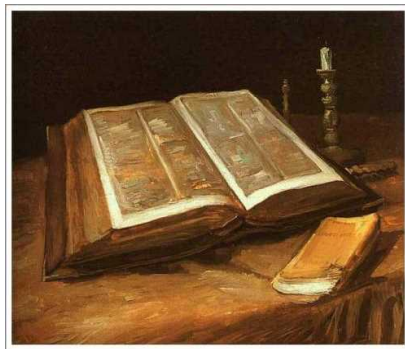
い者として、他の人々を裁いていました。しかし、イエス・キリストに結ばれ、イエスの命に生かさ

れるようになるとき、自分が頑張らなければ、自分が、自分が…という自縄自縛から解き放たれるのです。

パウロは「イエスの命がこの体に現れるために」(Ⅱコリ4:10)、「死ぬはずのこの身にイエスの命が現れるために」(4:11)と繰り返し語っています。精神修養をして、その結果、内面的な輝きが外に現れてくるというのではないのです。精神修養の価値を否定するのではありませんが、その点では、徹底して努力したパウロ自身がそこには答えはない、むしろ落とし穴があると言うのです。そうではなく、イエス・キリストという人格に結ばれて、それにより自分が新たにされてゆくことこそが重要である、と語りかけています。パウロはつぎのようにすら言います。「わたしは、キリストと共に十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」(ガラテヤの信徒への手紙3:20)。自分の中に生きているのは、もはや自分のちっぽけな命ではない。キリストがわたしの中に生きている、

と言うのです。コリントの信徒への手紙二4章16節の言葉に、もう一度、目を留めましょう。「たとえわたしたちの『外なる人』は衰えていくとしても、わたしたちの『内なる人』は日々新たにされていきます。」日々努力して自己革新を遂げるというのではなく、「新たにされていく」のです。受身です。信仰生活は他の誰にも代わってもらえない、自分自身の信仰の生活として、きわめて主体的なものです。その中味は根本的には受身的なのです。キリストを、神を信じ委ねるということです。そのことにより、日々新たにされてゆくのです。

ですから、日々聖書の言葉を味わい、祈りの生活をするという

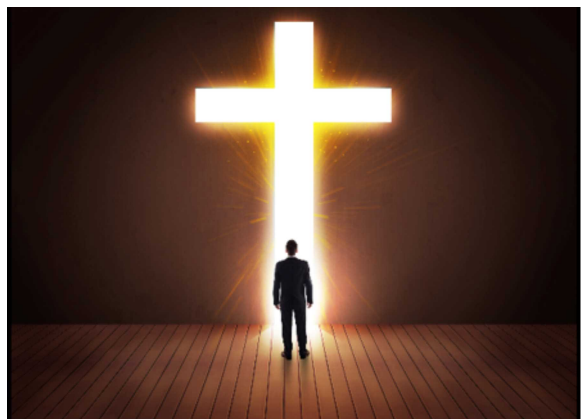


こと、主日の礼拝に与ることは、日々新たにされるために大切なことです。かつて、わたしの恩師が、キリスト教に関心のある学生に礼拝に出ることを勧めたところ、するとその学生は、毎週教会にゆくようになります。神を思う新鮮な感

動が惰性になるから行かない、と答えたそうです。この人は頭で、キリスト教に知的に関心をもっていても、信仰が生活のなかに根をおろすことの大切さが分からないのです。日々歯を磨くことが惰性になるほど、自分の生活の自然な、不可欠な一部になる。そのようになるほど、自分の日々の生活の中で、キリストと結ばれ、神との交わりのなかで生きることにより、絶えずキリストの光に照らされて、日々新たにされてゆくのです。その光は、世の初めに神の言によって輝き出で、人となって世の光となり、洗礼者ヨハネによって証しされ、ダマスコ途上のパウロを打って盲目にすると同時に彼の心の目を開く光となり、多くの先達の証しを通して、ついには、わたしたちの心の光となったのです。

主の光に照らされて、アドベント第3週の新しい一週間を歩んでゆきたい、と思います。

2018.12.16 日本基督教団千歳丘教会



1:1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。

1:2 この言は、初めに神と共にあった。

1:3 万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。

1:4 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。

1:5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

1:6 神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。

1:7 彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。

1:8 彼は光ではなく、光について証しをするために来た。

1:9 その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。

1:10 言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。

1:11 言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。

1:12 しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。

1:13 この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。

1:14 言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。

1:15 ヨハネは、この方について証しをし、声を張り上げて言った。

「『わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。」

1:16 わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。

1:17 律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。

1:18 いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。

1·1 Ἐν ἀρχῇ ἦν ὁ λόγος, καὶ ὁ λόγος ἦν πρὸς τὸν θεόν, καὶ θεὸς ἦν ὁ λόγος.

1·2 οὗτος ἦν ἐν ἀρχῇ πρὸς τὸν θεόν.

1·3 πάντα δι' αὐτοῦ ἐγένετο, καὶ χωρὶς αὐτοῦ ἐγένετο οὐδὲ ᓃν. ὃ γέγονεν

1·4 ἐν αὐτῷ ζωὴ ἦν, καὶ ἡ ζωὴ ἦν τὸ φῶς τῶν ἀνθρώπων·

1·5 καὶ τὸ φῶς ἐν τῇ σκοτίᾳ φαίνει, καὶ ἡ σκοτία αὐτὸ οὐ κατέλαβεν.

1·6 Ἐγένετο ἄνθρωπος ἀπεσταλμένος παρὰ θεοῦ, ὄνομα αὐτῷ Ἰωάννης·

1·7 οὗτος ἦλθεν εἰς μαρτυρίαν, ἵνα μαρτυρήσῃ περὶ τοῦ φωτός, ἵνα πάντες πιστεύσωσιν δι' αὐτοῦ.

1·8 οὐκ ἦν ἐκεῖνος τὸ φῶς, ἀλλ' ἵνα μαρτυρήσῃ περὶ τοῦ φωτός.

1·9 Ἦν τὸ φῶς τὸ ἀληθινόν, ὃ φωτίζει πάντα ἄνθρωπον, ἐρχόμενον εἰς τὸν κόσμον.

1·10 ἐν τῷ κόσμῳ ἦν, καὶ ὁ κόσμος δι' αὐτοῦ ἐγένετο, καὶ ὁ κόσμος αὐτὸν οὐκ ᾔγνω.

1·11 εἰς τὰ ἴδια ἦλθεν, καὶ οἱ ἴδιοι αὐτὸν οὐ παρέλαβον.

1·12 ὅσοι δὲ ἔλαβον αὐτόν, ἔδωκεν αὐτοῖς ἐξουσίαν τέκνα θεοῦ γενέσθαι, τοῖς πιστεύουσιν εἰς τὸ ὄνομα αὐτοῦ,

1·13 οἱ οὐκ ἐξ αἱμάτων οὐδὲ ἐκ θελήματος σαρκὸς οὐδὲ ἐκ θελήματος ἀνδρὸς ἀλλ' ἐκ θεοῦ ἐγεννήθησαν.

1·14 Καὶ ὁ λόγος σὰρξ ἐγένετο καὶ ἐσκήνωσεν ἐν ἡμῖν, καὶ ἐθεασάμεθα τὴν δόξαν αὐτοῦ, δόξαν ὡς μονογενοῦς παρὰ πατρός, πλήρης χάριτος καὶ ἀληθείας.

1·15 Ἰωάννης μαρτυρεῖ περὶ αὐτοῦ καὶ κέκραγεν λέγων, Οὗτος ἦν ὃν εἶπον, Ὁ ὀπίσω μου ἐρχόμενος ἔμπροσθέν μου γέγονεν, ὅτι πρῶτός μου ἦν.

1·16 ὅτι ἐκ τοῦ πληρώματος αὐτοῦ ἡμεῖς πάντες ἐλάβομεν καὶ χάριν ἀντὶ χάριτος·

1·17 ὅτι ὁ νόμος διὰ Μωϋσέως ἐδόθη, ἡ χάρις καὶ ἡ ἀλήθεια διὰ Ἰησοῦ Χριστοῦ ἐγένετο.

1·18 θεὸν οὐδεὶς ἑώρακεν πώποτε· μονογενὴς θεὸς ὁ ὢν εἰς τὸν κόλπον τοῦ πατρὸς ἐκεῖνος ἐξηγήσατο.